



仏像を丁寧に磨く立川さん

輝いています

ひと

仏師

たち かわ こう しょう
立川 幸照 さん

仏像に魂を込めて



▶明星観音像

室の作業部屋に置かれた、高さ約2.5m、カッラの木で造られた明星観音の像。爪先や服のしわなど細部までこだわって彫られたその仏像と向き合い、神経を集中させながら修繕作業に励んでいるのは、仏師の立川幸照さん（76歳・中央1丁目）です。仏師とは、仏像を彫ったり、修繕したりする彫刻家のことで、立川さんは江戸時代末期から続く仏師の家系の4代目。3歳の頃から父の指導の下、修行を積むとともに、父の勧めでさまざまな有名彫刻家に弟子入りしながら、己の技術

を磨いてきました。20歳の頃には日展にも出展するなど、一人前の職人として作品を手がけていましたが、結婚を機に大工に転職。家族を支えるために、一度はその道を閉ざしてしまいました。そんな立川さんの仏師としての魂に再び火が灯ったのは、東日本大震災のときでした。被災地のために自分ができるとはなにか。脳裏に浮かんだのは、「自分が最後に手がけた明星観音の像を役立てられないだろうか」ということでした。早速、蔵市に寄進を申し出たところ、岩手県陸前高田市にある金剛寺で役立てられることになりました。その仏像が今、立川さんのところに里帰りしています。金剛寺の本堂の再建に合わせて化粧直しをするためです。ひび割れには木を埋め込み平らにし、やすりで研磨と下色の塗りを繰り返すことで、人の肌のように滑らかに仕上げていきます。「腕のけがで作業ができない期間もありましたが、自分の生涯最高の出来にして渡したい」と意気込む立川さん。復興への願い、仏師としての誇り、さまざまな思いを仏像に込める大仕事

が今、続けられています。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.25 —



版本「近世女大学」口絵
暁斎画・土居光華著 明治7年(1874) 淡山楼刊

この絵は明治7年(1874)に出版された女性のための啓蒙書、「近世女大学」の口絵です。「近世女大学」は、江戸時代のための教訓書の書名をタイトルに付け、内容は西洋では男女が同権であることなど、明治時代の女性に必要な、当時最先端の知識や情報などを、時の文化

Kyosai
Kawanabe

現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

人・土居光華が記しています。暁斎は右頁には洋装の西洋人の夫婦、左頁には日本人の夫婦と子どもを描き、西洋と日本は文化が大きく異なることを絵画によって対比させ、分かりやすく読者に伝えています。

河鍋暁斎記念美術館 6月25日(月)まで
「暁斎・暁翠が見た明治維新150年」展 同時開催
「河鍋楠美コレクション 寄贈作品による現代作家」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 木曜日
 毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般600円
 中学生～大学生500円
 小学生以下300円
 (20人以上の団体は要予約)
詳細 = 同館 ☎441-9780



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください

